

『性の意味』キリスト教の視点から

『性の意味』キリスト教の視点から

宮谷宣史 編 新教出版社

折尾 嘉子

編集後記に「……現代のホットな問題のひとつ、性を取りあげている、と聞いた親しい友人は『難しいから、やめたほうがいいよ』と親切に忠告してくれた」に記載されている通り、「性」の問題はこみいっていて歯切れが悪い。取り上げるのに面倒でもある。特に私の場合は、現場が教会であるから、「性差別」という問題にいたると慎重にならざるを得ない。なぜなら教会には男女が集っている。男性だからといって、実際社会で差別されていないわけではない。社会における経済構造は権力構造であり、同時に能力第一主義ゆえに差別構造そのものである。男性もまたこのような現実の中で否応無しに活動せざるを得ないからである。もっともこれが男性中心社会の所産であることは言うまでもないだろう。

それでも、あえて「女性差別」に焦点を絞って論議することが今日の必須の課題である。「社会の流行には常に鈍感でありたい」が私の生活信条であるが、時代の潮流の余波は自然と被るものである。

ある委員会で「女性差別に関して」私の発言を求められたことがある。その時「女性差別は有史以来数千年に渡っていますので、被差別感覚は女性たちの身体の内部の遺伝子に組み込まれていますよ」と即座に答えた。つまりよく考えもしないで漠然とした意識での発言であったが、これはまぎれもない私の実感である。

1999年8月に「『性の意味』キリスト教の視点から」が発刊された。

この本は編集者の広い人脈を通して、編集者の主旨に賛同する多くの執筆者

『性の意味』キリスト教の視点から

により、それぞれの立場に即して様々な視点から著わされた有意義な論文である。

最初一読して、今日の諸問題を丁寧に網羅してあり、不遜にも手元に置いておくと有用な書物だというのが私の感想であった。中でも編集者の序論は、「性の意味」について複雑な事柄が分かりやすく整理されており、同時に文体も平易に著され、さすが啓蒙性に富んでいる。

編集者は本書の意図を序論において「性を問題にすることは、人間を、個人的であれ、社会的であれ、内的であれ、外的であれ、性という視点からその基本的存在を見据え、問題にすることに他ならない。つまり、性の意味を問い、人間のあり方をその基本において問うことである。逆に言えば、性の意味を問い、性を理解するとは、人間を理解することである。」と述べている。

本書のそれぞれの論文のテーマと執筆者は次の通りである。

序論	性の意味を問う意味	宮谷宣史
1.	生活における性	その検討の試み
2.	フェミニズムにおける性	その展開と意義
3.	キリスト教における性	その困難と課題

I

創世記二～三章における「男」と「女」	荒井章三
祭司文書と女性	木幡藤子
平等と不平等のはざままで——福音の地平における男女	D. ヴィーダー
新約聖書の性倫理——テキストとしての同性愛	小原克博

II

男性でもなく、女性でもなく、人間として

- ニッリのグレゴリオスにおける男女の問題……………土井健司
 ベギンの女性とマイスター・エックハルトの出会い……………中川憲次
 エラスムスにおける女性像……………木ノ脇悦郎
 近世フランスにおける女性の教養へのアプローチ
 ——ユマニスス、宗教改革、ジャンセニムス……………森川 甫

III

カール・バルトにおける性

- キリスト教神学と〈啓蒙〉の可能性の問題として……………掛川富康
 フェミニストの神学 ……………E.モルトマン＝ベンデル
 (宮谷訳)

日本の教会の女性たち

- 「女性役割」をキーワードとして ……………高寺幸子
 日本の教会とセクシュアル・マイノリティー
 ——現実と聖書からの検討……………大月純子

これらの論文が取り扱う課題の接近方法については編集者が序論で紹介しているとおりに、「私は、歴史的であれ、教理的な問題であれ、あるいは、現在ある具体的な問題であれ、それをキリスト教の視点から検討しようとする際の方法としては四通りある、と考えている。

1. 主題を聖書の中で、聖書から、聖書によって検討する。
2. 主題をキリスト教の歴史の中で見ていく。
3. 主題を現在の（社会と教会の）状況においてまた自分と関わらせながら検討する。

『性の意味』キリスト教の視点から

4. 主題について神学的に思索し、それを理論的に検討する。」

論述はみなその時代、その人の考えを、フェミニストの神学の視点から追求される。

1. の場合の困難さと限界性は聖書が「長い期間にわたり書かれた書物で、内容も多岐にわたっていること」「聖書の内容が男性中心であること」（さらに付すれば、男性による執筆文書）は編集者の指摘どおりだと思う。以下、その点に絞って私の関心のある部分を叙述してみる。

第一の方法の論文、荒井氏は『神と人間の修辞学』「つまづいたラブストーリー」から作者トリブルの聖書釈義を解説し、最後に人間の創造物語における「トリブルの方法論は一種のトートロジーがある。『女は男と平等である』という結論がまずあって、その結論を引き出すために、最初の『人』は『男』でも『女』でもあってはならない。そして、『人』は『男』でも『女』でもないのであるから、『男と女は平等なのである』。このような方法論は別として、彼女の男女の平等性を求めるフェミニストの立場を私は理解しないわけではない。とりわけ、欧米では『聖書』が規範としてとして人間観に大きな影響を与えており、従ってそれを壊そうとするトリブルの意図は十分理解できる。しかし、テキストのなかに無理に女性復権を求めるのではなく、むしろ、創世記二～三章の物語では『人』はあくまで『男』として想定されていることを認め、テキストそのものの不当性、つまり男性優位の姿勢があることを指摘するほうが、正しいのではないだろうか。」と論述している。私はこの人間創造物語は「旧約の民イスラエルの人々の人間観、男女理解の反映であって、人間創成論ではない」と旧約聖書神学講義で教えられたのを、今日でもその通り理解している。トリブルの今後の研究に期待したい。加えて荒井氏は「……創世記2～3章における女もまた不当に扱われていることをわれわれは素直に認めねばならないだろう。そのような素直な認識から新たな地平が開けるに違いない」。まさに、聖書釈義もまた時代の子なのだ痛感する。

聖書解釈と現代の性理解の適応について、小原氏はこれまで同性愛を批判す

『性の意味』キリスト教の視点から

る根拠として引きあいにはだされてきた聖書テキストを取り上げ、「結論的にいうと、新約聖書が問題としている同性愛と、今日われわれの考える同性愛とはまったく異なる。すなわち、今日の同性愛問題全般に対して有効な指示を引き出すことは不可能である」。これまで逐語的な聖書理解によって簡単に他者を切り捨てたり、意味のない差別を作り出してきた時代もあったのだ。

そこで編集者は「……イエスならこの場合どうなさったか、……基本的には、抑圧されている人々、困難な立場で生きざるを得ない少数者、体制から排除されている人々を避けて通らず、むしろ彼らと連帯なさる立場をとられる、と言えるだろう。」「……聖書解釈の結果については、その内容と方向が福音の中心的な教えとあまり異なる場合には自己検討を要するし、また、獲得されたものを絶対化して、他の立場や解釈を誤りとして排斥することは慎まなければならない。」と述べている。

第二の方法での論文は歴史家にとって意味があるかもしれないが、私としては、現代社会との直接的関わりと説得力という意味であまり有意味性を覚えない。

第三の方法でのモルトマン＝ヴェンデルの論文は、私自身彼女の講演を傾聴したことがあり内容に共感した。特にVI 神は男性か 「神は御自身をわたしたちのあらゆる姿と、私たちが彼ないしは彼女に与えるすべての名前に合わせますが、しかし、そこに固執することはありません。…神は男になりました。これをわたしたちは経験しました。そこで、わたしたちは、われわれが神を今度は女性的な牢獄に閉じ込めないように、注意すべきです。」の部分です。

私は15年前に、つまりフェミニスト神学が開花して20数年も経過したころ、アメリカ西海岸にあるバークレー神学校を見学させていただいた時、フェミニスト神学に学ぶ学生たちが、十字架上に女体裸像を架りつけにして神学部玄関前に立てかけたというエピソードを聞いた。その時はすでに取り退けてあった。その他にも「神の呼び名」についての神学的問題、教職の「同性愛者」の職場問題などの現場の事情に接した。これらは過激だが時代の過渡期なのだと印象深い経験であった。

『性の意味』キリスト教の視点から

またVIIイエスーパラディグマ（模範）・相互性のところで「マリアは、すでに父権性により占領されていますが、わたしの考えでは、新しい衣類で、少なくとも橋渡しの手助けができます。もし女性が、人間その固定化された役割から解放し、新しい地に向けて働きかけようと欲するなら、女性中心の霊性と女性に対してのみ向けられた教会は長続きしないでしょう。それでは、女性は不当な態度をただ裏替えして行うだけになるからです。」とモルトマンは述べている。

私が主任担任として働き始めた頃、「男性の牧師に負けないためには、女性牧師には男性牧師の三倍の働きが要求されます。説教の準備のための学び、牧会、教会事務、その他、あらゆる雑用全てです」との忠言を賜った。その時「男性牧師に負けないように、男性並みに」という考えは、私にはあまり痛切感がなかったのだ。女性牧師に任地がないことや、男性牧師たちの女性蔑視、男性優位の教会形成の現実など知らないわけではなかった。が、その先輩より十年遅く牧会現場に出た私には「男性並みに、男性に負けないように」という意識はなかった。男性と競いあうといった仕事の仕方には意味がないと考えていた。先輩と私との意識のずれは、生育世代十年の間隔ということもあるけれど、それまでに特別学んでいたのでもないが、フェミニスト神学の恩恵かもしれないし、また社会の男女の役割に対する意識変革の影響などによるのかもしれない。そのように考えると、これからの若い人たちは私たち以上にもっと意識の異なる考えを身につけて現場に出るのだろう。日本の社会とセクシュアルマイノリティの大月氏の論文には、教えられた。

終わりに

「なお最近では、男女の性にとらわれず、自分らしく生きるという『ジェンダー・フリー』が提唱されていて、興味深い。また、ジェンダー間に『カセクス』領域を設定し、人間が他者に対して何らかの情緒的な重荷を持った社会関係を構成している点に焦点を置き、性の問題を考慮していく動きがあり注目される。この領域の情緒的構造の原点を愛とみなし、たとえば、恋愛、結婚、

家庭の絆、異性愛、同性愛を問題として取り上げ、この視点から現代における愛の自由化、選択化や愛の市場化などを社会学的に分析していく。柳原圭子が指摘するように、確かに、今日、個人のカセクシス対象の選択権は広がっている。彼女が挙げる例としては、シングル・ライフや離婚に対する社会的許容度の拡大、配偶者選択の年代的、空間的範囲の拡大、『産む性』『産まない性』の相対化、同性愛に対する社会的禁止の緩和などである。このように見ると、ジェンダーの問題は、今強く意識され出し、性に関する従来の文化的・社会的に固定された見解と態度は、現実に変革されつつある。そこで、このような現実のなかで、どちらかといえば、伝統的な体制と価値観に因われがちな教会の性に対する立場も改めて検討を要する、と言えよう。」編集者の教会に向かったの問題提起である。(29～30ページ)

確かにそのとおりだと思う。ただ教会がこのようなセクシュアリティやジェンダーの諸問題に対して方向性を打ち出そうとすること自体が僭越ではないかと私は思う。

教会の役割は、このような問題に対して諸々の多くの過ちを繰り返すであろう人間の罪がくそれにもかかわらず、福音によって許されているという神の恵みのリアリティを差し出すことこそ、その本来の使命と役割があるのではないだろうか。

性の解放と自由という社会現象をめぐって、家族間の問題、育児問題、その他、複雑な絡まりの中で生起してくる諸々の問題がある。たとえば、教会にも母とその母の再婚の相手である義父とうまくいかず、生活保護を受けている祖母の家に逃げ込み、神経病院を入退院しながら、時折礼拝に集う少女がいる。

多種多様な性の有り様が人間を解放し、多彩な人間関係を作りだし、従って人格形成にも豊かな成熟へと向かっているのだろう。ただし、このような自体が人間社会にどのような結果をもたらそうとしていくのか、誰にも知らされていない。当然私たちは、その結果も背負ってゆくのだ。

男という人間、女という人間が相互に向き合い、どのような方向に向かえば、神に授与された性を生かし合うことになるのか、今後も模索していく

『性の意味』キリスト教の視点から

ほかないだろう。

母親、父親の役割意識も変わってきている昨今である。前記の母も、義父も、そして娘もそれぞれが自分の選んだ境遇を生きていく他はないのだ。

教会は誰を責めることができようか。ただ、現実をそのまま受け容れ、「神の前に生かされている存在」を福音によって再受容し、共に歩んで行くのである。